

減災を考える

—自分と家族の命は自分で守ろう—

発生から4か月半、現在も被害が伝えられる「熊本地震」。

今なお、数千人の方が避難所の生活を余儀なくさせられています。

8月30日から9月5日は「防災週間」。私たちの地域にも、いつ起こってもおかしくない災害への備えを、今一度見直してみましよう。

来るべき南海トラフ大地震に備えて「減災」

今年4月14日夜に熊本と大分の一部を襲った熊本地震。最大震度7を記録し、二日後の16日には、震度7の本震が観測されました。

震度7は、九州地方では初めての観測事例であり、特に、震度7が2回観測されたのは国内初めてのことです。大きな揺れが何度も発生し、建物の倒壊や土砂崩れなどの大きな被害が特徴的でした。

平成23年の東日本大震災、今年度の

熊本地震と、わずか10年の間に2度の大地震を経験し、もはや国内ではいつどこでどんな災害が起こってもおかしくないという意識が高まり、国や自治体の防災の取り組みは、「災害は防ぐことはできない」という考え方が、「防災」ではなく、被害を最小限に抑えるという「減災」という考え方に切り替わってきました。

私たちが住んでいる東海地方でも、今後南海トラフ（四国の南の海洋にある水深4000m級の深い溝のこと）を震源とした巨大地震が発生することが予測（大口町内の最大震度は6

弱と予想（内閣府発表））されており、最悪の被害を想定した減災対策の必要性が叫ばれています。

日頃の備えを

家庭の日常の備えとして最低限準備してほしいことは、次の3点です。

①非常持ち出し品と家庭備蓄品の準備

「大口町まちなかカレンダー」や「防災マップ」の巻末に載っている「非常持ち出し品リスト」を参考に、いつでも持ち出せるようなリュックなどにまとめておきましょう。



平成19年新潟県中越沖地震により（新潟県柏崎市市内）



また、備蓄品として意外と見落としがちな食料品。普段使っている食材などを工夫すれば備蓄食料になります。ご家庭で実践してみてください。

「水」 ペットボトルのミネラルウォーターを購入している家庭は、ダンボール1箱を余分に購入し、



常備してください。

年配の方で、水を購入するのに重たくて抵抗のある方は、今は災害備蓄用に5年保証のペットボトルの水も売っています。もしもの時に備え、購入してください。

「食べ物」災害用非常食を購入しなくても、缶切り不要の缶詰や卓上コンロのある家庭では、常温で保存のきくインスタントラーメンや乾めんを余分に購入し、食べ回しなかり買い足すことで備蓄になります。保存食として便利な冷凍食品は、通常時は保存がききますが、停電になると数時間でダメになることを覚えておきましょう。

また、お子さんがいる家庭等は、粉ミルクや紙おむつ、目が悪い方は眼鏡など、特別必要なものは各自で、必ず準備しておきましょう。災害時、町の備蓄食料だけでは、住民全員の備蓄量はありません。皆さんが各家庭で7日分の備蓄をしていたことが大変重要です。

②家屋の耐震補強、家具の転倒防止対策

一日のうち一番滞在時間の長いのは自宅。どんなに家を空ける時間が長い方でも、就寝時間などを含めると平均一日10時間程度は自宅で過ごしているのではないのでしょうか。自宅の耐震も改めて見直しておきましょう。家全体の耐震が難しい場合でも、家族が集まることのできるひと部屋、寝ている部屋だけでも補強しておくといざというとき安心です。家屋の耐震に対しては、町より補助が出ますので、詳しくは役場 都市整備課 にお問い合わせください。

また、家具の転倒防止対策はしてありますか？ 腰より高い家具などは危険です。簡単に取り付けられる転倒防止グッズがホームセンターで手に入ります。日頃過ごすことが多い寝室や居間だけでも

万全にしておきましょう。

③家族と避難所の確認を

大口町ではお住まいの地域ごとに避難先を指定していません。各家庭で、家族の集合場所となる避難所を決めておきましょう。また、その際の最も安全な避難ルートも同時に確認しておきましょう（近道ではなく、広い道路を選びましょう）。

大口町が指定する避難場所は次の8つです。

- ▼大口南小学校
- ▼大口西小学校
- ▼大口中学校
- ▼大口北小学校
- ▼ほほえみプラザ
- ▼大口町民会館
- ▼中央公民館



▲北地域自治組織の北地域避難・防災訓練

まずは自助、そして共助、公助へ

東日本大震災や熊本地震から得た教訓のひとつに、「いざというとき助けてくれるのはお隣の人」という事実があります。

「自助」つまり自分で自分や家族の身を守ることは大前提ですが、それと同時に「共助」、つまり、隣近所や地域で助け合うことが大切です。

地域のつながりが希薄となっていく昨今、改めて近所づきあいの大切さを見直してください。お隣の家族構成や一日の動き、持病の有無など、知っていますか？ 震災時に「〇〇さんの2番目の男の子をどこどこで見たい」「〇〇さんのお宅がいらない」と教えてくれるのは、近所の人です。それには、地域の行事に積極的に参加して交流してほしいと思います。清掃やごみ当番でちょっと会話をしてみてください、地域の防災訓練に顔を出してみてください。話したことのない近所さんに意外な接点を見つけたら、知らなかった地域の貴重な情報を入手できたりするかもしれません。

「公助」、つまり行政や消防、警察は

人数が限られている上に、どうしても地域の細かい情報には疎いという弱点があり、小回りがききません。公助をあてにせず、まずは自助、共助を指してください。

自主防災の広がり

近年、来るべき大災害に備え、地域でも自主防災の取り組みを積極的に推進する動きがあります。ここでは、その中の一つ、さつきヶ丘区の取り組みについて紹介します。

さつきヶ丘区では、平成27年4月にさつきヶ丘防災センターを避難所とする「避難所運営マニュアル作成プロジェクトチーム」を発足させ、区の自



▲さつきヶ丘防災センター

治会役員やふれあい運営委員(防災センター)を運営する委員)を中心に、1年かけて「避難所マニュアル」を完成させました。それとともに、避難所の備蓄品や区の防災訓練プログラムの充実も図りました。

平成28年4月に制定された「避難所運営マニュアル」はファイルにして全100冊。愛知県や他府県のマニュアル、近年起こった大地震の事例を参考にし、区の実態に合うように細かく設定し直しました。その内容は、大災害発生時(南海トラフ大地震を想定)における避難所開設の手順、各役員の役割分担から避難所としての各部屋のレイアウト図まで、パニック状態の中でも最低限の迅速さと冷静さを保てるよう、災害の各段階ごとに合理的に定められています。

このマニュアルをもとに、大口町ちとせ会(さつきヶ丘区)や子ども会とも連携して定期的に防災訓練を実施しています。ごきょうごころのときのための予備訓練になると同時に、日頃の対策として重要な地域の交流のきっかけにもなっています。

増子区長は「自らの身の安全は自ら守る」という心掛けが大切。そのため

には、日頃から災害訓練を怠らないことです。実際に災害が起こったという想定で、地域の避難所運営訓練もやっておくことも理想」と話されました。

取材にて

今回の熊本地震で特徴的だったのは、被災した方々の中に、避難所へ行かず生活をする方が多く見受けられたことです。避難所が収容能力を超えた場合、どうしても個人の十分なスペースがとれず、仕切りなども人数分用意できないため、プライバシーの問題が避けられません。そこで、近所同士協力して広い場所を使って炊き出しをし、無事だった自家用車を使って車中泊をする方が多く出ました。避難所に滞在しないことで所在が把握できず、避難物資を届けることができないことが今回の課題であり、それほどまでにプライバシーの問題が深刻であることを考えさせられました。

いざ、そういう状況になったときにやはり助け合うのは近所同士。近所や地域の交流が盛んであれば、避難所に収容しきれない事態が発生しても、誰かが、ごきょうごころかというのを把握す

る貴重な情報ルートを確認できる可能性が高まります。また、避難所での混み合った環境でのストレスを緩和するのも日頃の近所づき合い。一人でも多くの人が見知った仲であるかどうかは、避難所生活を安心安全にすると同時にプライバシーのない状態の精神的苦痛を和らげます。

今月の防災週間をきっかけに、改めて自身の災害への備えを見直し、地域の交流や日頃の防災意識を点検してみましよう。

あなたのお手元に災害時の緊急情報をお知らせする！

あんしん・安全ねっと

防災・防犯メール配信サービス

携帯電話からの登録方法 携帯電話から下記メールアドレスへ空メールをお送りください。送信された携帯電話のメールアドレスあてに「本登録」の手順をご案内します。oguchi@entry.mail-dpt.jp



※QRコードを使用できる機種をお持ちの方は右のQRコードをお使いください。迷惑防止のためのドメイン指定が必要な方はtown.oguchi.lg.jp、アドレス指定が必要な方はbousai@town.oguchi.lg.jpを許可してください。